

魂の試される時

(上)

丹羽文雄



魂の試される時

(上)

丹羽文雄

新潮社版



© Fumio Niwa, 1978 Printed in Japan

魂の試される時(上) たましいのため とき		昭和五十三年 一月二十五日発行	昭和五十三年十二月十五日七刷	著者 丹羽 文雄 に わ ふみ お	発行者 佐藤 亮一	発行所 株式会社新潮社	〒 東京都新宿区矢来町七十一	電話・業務部(03)二六六一五一一 ・編集部(03)二六六一五四一一	振替 東京四一八〇八	印刷所 東洋印刷株式会社	製本所 神田 加藤製本	定価 九五〇円
---	--	-----------------	----------------	-------------------------------------	-----------	-------------	-------------------------------	---------------------------------------	------------	--------------	-------------	---------

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

目 次

川瀬家の人びと	7
萩	21
六年前	27
父と子	51
ひいらぎの花	62
運命	70
肉親をよそに	87

個展の昂奮	247
春の出来事	220
自嘲	186
闘	172
異変	151
白いネック	114
仕事部屋	95

装
幀

篠
田
桃
紅

魂の試される時（上）

川瀬家の人びと

たがいの車が徐行しながら、やっとすれちがいの出来る邸町の道路であった。一台の外車が音もなくすべりこんでくると、川瀬家の前で速度を落して、反対側に向け、その駐車場のり入れた。その気配で、小柄な、六十年配の男がいそいであらわれた。

扉をあけて、

「おかえりなさい」

主人の林作を迎えた。

「あとを頼むよ」

林作は道路を横切って、わが家の門をはいった。両側の庭木が、玄関までの石畳みの道をせばめていた。中でも蘇芳は、場所ちがいのように背をのびし、丸い葉をひろげていた。この灌木は、林作がとくに植えさせたものであった。父の代からの和風の建物や、庭には手を加えないことにし

ていたが、門をはいったそのつつじが枯れたので、蘇芳を植えた。その灌木の成長が、あたりの調和を破っていた。玄関の石の柱のうしろに、人影があった。小さい女の子が、こちらを眺めていた。近付くと、石柱の陰から、愛子の笑顔があらわれた。

「ブザーを押そうと思ったとき、おかえりの車の音を聞いたので」

片手に娘の手をとりながら、愛子がかかる頭を下げた。くつきりとまん中から髪を分けているのは、愛子の特色であった。その髪をみると、林作は終戦のときのことを思い出す。もんべすがたの愛子の、二つに分けた髪が、いかにも清潔で、印象的であった。あれから二十年も経っているが、髪形は昔のままであった。

「しばらくだったね。愛子はふとったようだね」

すこしからだをねじるようにして、愛子は笑った。

口が重いという方ではなかった。結構おしゃべりになるのだが、林作とふたりきりになると、口数がすくなくなっていた。その代り、気持の動きは、からだ全体であらわした。だまってそこに坐っていても、大柄なからだだが、ことばにならないことばで話しかけてくるようであった。

「今日はよく出て来られたね」

「いま、おばあちゃんが来ています」

「おばあちゃんは、孫に会いたくて、時どき出かけてくる
ときいていたが……」

「たったひとりの孫ですもの、目に入れても痛くないので
しょう」

林作は相手の心をのぞきこむようにして、

「そのため、愛子には時間が出来るといふわけか」
うなずいて、林作だけに通じる謎めいた微笑をうかべた。

「今度の金曜日の午後一時、例のところで会おう」
相談でなく、頭ごなしないい方であった。愛子がまた、

大きくうなずいた。林作の目の中には、そこに子供をつれ
た母親が立っているのではなく、ひとりの女が立っている
ような感情の動きがあった。

林作が、プザーを押した。家の中にプザーが、低くひび
くように鳴るのが聞えた。

お手伝いさんのきよが、玄関をあけた。うしろのかまち
に、妻の博子が立っていた。

「おかえりなさい。おや、愛子もいっしょだったの」

博子は愛子にも声をかけたが、すぐ相手を変えた。

「涼子、学校を休んできたの？」

「ううん、学校はおひるまでよ」

「今日は土曜日ね、そうだったの。さあ、お上り、いいと
きだったわ。おばさんがお菓子をつくったの。涼子がいた

らよろこぶだろうと思つてたところよ。虫の知らせね」

小さい肩に手をかけて、博子は茶の間への廊下に消えた。
林作は靴をぬいで、かまちに上ると、愛子と顔を見合わせ
た。愛子は、ちょっと工合悪そうであった。すると、林作
はそんな女ごころを面白いと思つた。

「正面玄関からはいると、勝手のちがつたよその家に来た
ように、とまどいます。いつもは私の出入口は、台所の口
にきまつてたんですもの」

戦争で家を焼かれると、愛子の一家はちりぢりになり、
親戚をたよつて世話になった。愛子は遠縁の博子をたよつ
て、川瀬家にやつてきた。この家のことは、何から何まで
知っていたが、堂々と玄関から客としてはいつてくること
には慣れていなかった。

食堂から、賑やかな声が聞えた。涼子の声にまじつて、
次男の友彦の声がしていた。愛子は茶の間にとおらず、台
所にはいった。そこがいちばん安心の出来る場所のようであ
った。

愛子は、きよの手伝いをはじめた。

林作は着換えの部屋で、博子の手をかりて着換えをして
いた。

「うちは週五日制にしたよ」

その意味が、博子に通じなかった。

「外国には、すでにそういう制度があると聞く。うちは従業員といったところで、三人しかいないんだ。忙しいときは忙しいが、ふだんはあそんでいるようなものだからね」日本橋に、川瀬貿易商があった。ビルの三階に四室を借りていた。

「それじゃみなさんが、大よろこびでしょうね」

「たった三人の従業員では、組合もつくれない。もともとうちのような仕事は、電話一本で、ひとりだって出来るんだからね」

和服になって、林作は茶の間に坐った。これは先代のまねであった。とくに和服に着換えたからといって、くつろいだ気分になれるというのではなかった。日本家屋では和服の方が、うつりがよいというだけであった。外国へいけば、何ヶ月も洋服でとおしていた。和服を着たいという気もおこさなかった。

「これ、おばちゃんまがこしらえたお菓子です」

お盆に菓子皿をのせて、涼子がはいってきた。そのテーブルに置く前に、林作が両手を出した。

「涼子の頬っぺたに、おいしかったと書いてあるよ」

博子をつくるアップル・パイは、近ごろ腕をあげていた。林作は小さいフォークで、ひと口口に入れたが、あとをつげなかった。甘いものは苦手であった。涼子を相手に、

学校のことなど訊いていると、目の前の芝生を学生服の庸がとおりかかった。庭木戸から芝生にはいつてきた。

父親をみかけると、

「あつ、おかえりなさい」

頭を下げた。縁側をへだてて、芝生があった。その向うは、通りすがりのひとがこちらをうかがえない程度に庭木が茂っていた。

林作は、庸のような大きな息子があろうとは思えないほど若々しい顔立ちであった。四十三歳になるが、三十五、六にみられた。彫りの深い顔立ちは、庸にうけつがれていた。庸は少年から青年にうつりかけていた。その年齢の特色として、顔やからだつきに、青白いような弱々しいものを感じさせるが、それは外形の成長が早すぎて、内容がついていけない状態であるのかも知れなかった。

博子が茶の間にはいつてくると、涼子が友彦の部屋にひかけていった。

「愛子たちは、夕食をすませてからかえるつもりだろう？」

と、林作がいった。

「そのつもりで、支度をさせてます」

林作が思いついたように、

「土屋家の人びとは能筆家だったね」

博子が、うなずいた。

「萩さんのお母さんが、徳川家の祐筆の孫だったという話をきいたことがあります」

祐筆とは、貴人のそばにあって、文筆にたずさわったものをいうのだが、その血を土屋の人びとは受けついでいた。「事務所の方に、日展の招待状が届いたのだ。ひまがあったら、一度見に来てほしいと萩さんの筆跡があった。日展に萩さんのものが入選したのだそうだ」

博子は、萩の顔を思い浮かべながら、

「おめでたいことですわ。入選ということ初めて聞きましたから、初入選というんでしょうね。あなたの代りに、私がいきます。是非見たいと思います」

「当分私は忙しいから、とてもそんなひまはないよ」

「招待状を、こちらにまわして下さい」

萩の父親の何回忌かに、林作の代理として博子は、本郷の正念寺に詣つた日のことをおぼえている。母親や兄たちと並んで萩が挨拶していた印象が、あざやかであった。土屋家といえ、林作にとっては主筋にあたる。林作の父親が、土屋貿易商に十年以上も番頭をつとめていた。のれん分けのように独立したのが、川瀬貿易であった。

「萩さんといえ、私はいつもほんものの萩を連想します。まさかご自分の娘が成人して、擽んで咲く、あの独得の美

しさのある萩のようになってほしいと望んで、ことさら萩という名をおつけになったわけではないでしょうが、華奢なからだど、やさしい顔立ち、萩を思わせますわ」

「そういえば、あの人にはつらいことがあったと聞いているが……」

「大抵の人には、ひとたまりもないような打撃にも、身心ともによく擽つて、ご自分の道を切りひらいていくような方ですわ。日展入選は、あの方が立派に耐えられたあかしではないでしょうか」

川瀬家の食堂のテーブルの席順は、きまつていた。林作と博子が向かいあつてはなれてかける。林作の右となりが庸、その次が友彦である。今日のお客の愛子は、博子の右側の席につき、涼子と庸が、向かいになった。涼子は、林作の左のすぐそばであった。

大人でも抱えかねるほどの大きさの象の彫刻があった。外国の得意先からの贈物であった。涼子はこの食堂にはいると、何となく象が気になるらしかった。

「涼子は象が気に入ってるのか。それなら涼子にあげるよ」

と、林作がいったことがあった。すると、涼子がおびえたようにげしく首を振った。

「ふふん、涼子が男の子だったら、大よろこびをするだらう

うが、残念だね」

涼子がもらってよろこぶのは、食堂の高いかざり棚にあるゴルフのカップのようであった。大小のカップが、五個あった。林作がゴルフのトーナメントで優勝したものである。

ハンディは、十五であったが、ゴルフ歴は戦前からであった。亡くなった父が、二、三のゴルフ・クラブのメンバーになっていた。林作がそれをうけついで。戦後は、新しく出来たゴルフ・クラブのメンバーにもなっていた。林作にとってゴルフは、商売の内であった。メーカーの部課長級とプレイをしたり、たまに外国からくる得意先の社長や重役とコースをまわった。

「車の運転資格は、入社の一つの条件になっている。その内に庸も運転をおぼえるとよいが、その前にゴルフを習っておいた方がよい」

といい、林作は中学生になった庸を、たびたびコースにつれ出した。

「貿易商にとっては、ゴルフは必須科目だよ」

軽井沢のゴルフ・クラブも、林作はメンバーであった。

ある夏、林作が庸を軽井沢につれていった。そのころはまだ軽井沢に川瀬家の別荘はなかった。一年の半分は外国をたび歩いているので、軽井沢でゆっくり夏の休暇をたのし

むという気持はなかった。が、家族や老後のために、適当なところがあつたらというくらいに関心はあつた。

庸は軽井沢につれていかれたその日のことを、はつきりとおぼえている。ホテルの食堂で、父と向きあっていると、ボーイが洋装の女性を案内してきた。

「黒坂菊乃さんだ。お父さんのゴルフの友達だ」

大柄な、三十歳ごろの年齢にみえた。襟足がきれいなひとであつた。庸は女性の正体をひと目で見破るほど世馴れていなかった。父も、説明しなかった。が、ふたりの会話をきいていると、父とはかなり親しい仲のようであつた。大人たちは、酒をのんだ。偶然ホテルで出会ったとも思えなかった。女友達は、普通の家庭のひとではなさそうであつた。

「庸は、街を歩いてくるがよい。黒坂さんは、まだのみ足りないようすだから、ホテルのスタンドで、のんでいるよ」

黒坂は、にこにこしていた。

庸は、ボーイに教えられた暗い道を旧道に向けて歩いた。まるで樹木のトンネルをくぐるようだと思った。ようやく旧道に出た。小一時間ほどぶらついてから、ホテルにかえって来ると、ホテルのバーには父の姿がなかった。

二階の部屋に上ると、父の林作がそこにもいなかった。洋簞笥をあけると、父の上衣があつた。父がカーデガンに

とりかえたのが知れた。

庸はシャワーをあびると、あとは寝るだけであり、ベッドにはいった。父がホテルのどこかにいることは判っていたので、女の子のようにうろたえることもなかった。その内に、庸は眠った。

目ざめたとき、窓は明るくなっていた。となりのベッドに、父が眠っていた。いつかえってきたのか、すこしも知らなかった。

食堂に下りると、黒坂菊乃が派手な色合いの服をきて、テーブルに待っていた。

「よく眠れた？」

と、林作が笑いながら訊いた。

「おかげさまで、ぐっすり朝まで眠りました。お酒のせいですわ」

庸をちらりとみて、笑って答えた。

三人は、車でゴルフ場に向った。

黒坂菊乃は、かなりの腕前であった。おぼえはじめの庸よりも、はるかに遠く球をとばした。林作と話しながら、ときどき庸にも声をかけた。素人女ではないと、何となく庸にもわかるのだった。

かえりは三人がおなじ列車であった。上野駅につくと、「ありがとうございます」と挨拶して、はなれていった。

そのことを、庸は母に報告しなかった。父のゴルフ友達に、女性がいところで、すこしも不思議はないのである。が、その後、伊豆の川奈ホテルに父につれられていったとき、食堂にはいつていくと、遠くのテーブルから手をあげている女性があった。林作が、そのテーブルに近付いた。

「庸君ね？」

女に声をかけられた。庸は、うろたえた。椅子につくと、「よく似てるわ。ハンサムね。いまにお父さん以上になるわ」

庸は、顔が熱くなるのをおぼえた。ずけずけものをいうひとだと思った。自分のことを知っているらしいので、気づまりなことはなかった。

「この人は、お父さんもとどきどき負かされるくらい上手なひとだ」

名和まり子というゴルフ友達の名前を教えられた。名和まり子は、小柄であった。何ものか、庸には見当がつかなかった。

その夜、かなりおそくまでロビーのテレビを見ていて、二階の部屋にいくと、父の姿がなかった。

庸は先に眠った。朝が来ると、父はとなりのベッドでよく眠っていた。軽井沢のホテルでおきたことと、そっくり同じことがおこった。相手の女性がちがっているだけであ

った。

庸は帰宅後、川奈の風景を母に報告したが、父が夜中に行方不明になったことは、だまっていた。何故だまっているのか、自分でもよくわからなかったが、女の子のようにいちいち告げ口する気になれなかっただけである。が、父が夜中に蒸発する事情については、大体の想像がついていた。しかし、何がおこっていたのか、そこまではわからなかった。

林作は、庸に口止めするようなことはひと言もいわなかった。子供扱いにしているか、それとも大人扱いにしているか、どちらかであった。

食堂には、博子と愛子が最後までのことた。いつもの習慣であった。たまに愛子があらわれると、気を許した話相手が出てくれたように、博子は愛子をひきとめた。ふたりは、おしゃべりをしていて、よくもそれほど話題がつづくものと呆れるほどに、あとからあとに話をしていた。

ひとつには、戦災ではだかになった愛子が、博子は可哀そうでならなかった。結婚するときにも、親代りのように面倒をみた。生れは、岐阜であった。小学校の教員と結婚して、東京に住むようになると、まるで実家のように川瀬家に出入りしていた。愛子のやさしい気性を、博子は愛していた。たまに顔を出せば、到来ものの菓子や、食糧を持

たせてかえすことにしている。すなおな愛子の性格は、すこしも卑屈な感じをあたえなかった。

博子の古いきものをもらって、それを着てくることもあった。

「博子かとまちがえたよ」

と、林作が笑った。

妻が妹のように愛子を可愛がっているのを知っていたが、それとこれとは別だと、林作ははじめから割りきっていた。林作は妻の気持を推測するということがなかった。林作の目からみれば、愛子は世間の女のひとりにすぎなかった。ゴルフ友達の黒坂菊乃や、名和まり子とおなじであった。

結婚して間もなく博子は、林作に女友達の多いことを知った。しょっちゅう心やすく女から電話がかかってくる。

どの程度の女友達か、博子には見当がつかなかった。はじめの内はこたわっていたが、林作が大っぴらにふるまうので、貿易商というものは、女性関係に多少ルーズな点があるものかと思うようになった。博子のそだった環境は、女性問題で家族が悩んだという経験がなかった。

博子の学校時代の友達で、長女でありながら、独身とおしているのがいた。妹二人は結婚したが、友達は結婚を拒みつけ、いまでは未婚のまま一家の主人となっていた。美貌なひとであった。

「どうしてあなたは結婚しないの？」

博子が訊いた。

「私は父の女性問題で、母がさんざん苦労したことを見ていたせいか、結婚をするまいと、いつからか自分で決心してしまったのよ」

そういう友達的心境が、博子には理解出来なかった。博子は、その逆の立場でそだった。

——いつも外国をたび歩いている。一ヶ月も二ヶ月もかえって来ないことがある。その間の男の欲望をどう処理しているのか。

一応は、疑いのとりこになった。が、本人を問いつめるということとはしなかった。疑いながら、それを追究することとせず、半信半疑の状態で、それに慣れてしまった。そういうことも可能であった。博子は、ふたりの子供をそだてることに専念した。

——私の性格は、悩んだり疑ったりすることが嫌いで、それを避けて通るのだ。

いつか妻は夫に対して、一定の距離をもうけるようになった。すると林作は、それをかえっていいことにした。

愛子たちのかえる時間になった。愛子は風呂場となり洗面所にはいつて、顔をなおしはじめた。

すこしふとったようだと林作にいわれたのが気になって、

両手で頬をおさえて、顔をみつめた。娘のころから大柄だったのが、腺病質を思わせるように、肉づきが悪かった。

涼子を生んでから、すこしずつ肥ってきた。蒼白い肌が、白くなった。腕の毛を気にしていたが、いつからか気にならなくなった。

庸の部屋は、奥のはなれにあった。食事が終ってからすぐそこにひっこんでいたが、生理的欲求をおぼえて、廊下に出た。トイレは、納戸をへだてて洗面所となりであった。用をすませて、何気なく洗面所の前をとおりがかった。洗面所に灯がともっていた。そこはすりガラスになっていた。たれかの影が映っていた。通りすがりにちらりと見ただけであったが、女性のかげであった。ひとりではないようであった。といって、話声はきこえなかった。庸は、母がいっしょに洗面所にはいつているのかと思った。愛子や母が、ときどき洗面所で顔をなおしているのを目撃していたからである。

廊下をまがって、自分の部屋にいくとすると、茶の間から母の声がきこえた。

——すると、あのかげは、母でなかった。

と、気がついた。

——たれがいっしょだったのか。

きよではないかと思った。その疑問を解こうとして、念